

令和三年度日本航空高等学校石川

第三回模擬試験問題（国語）

受験番号
氏名

一

次のA～Cの問いに答えなさい。

A 次の1～5の傍線部の漢字の読みを、ひらがなで答えなさい。

- 1 新入部員を勧誘する。 2 牛を放牧させる。
- 3 決勝大会に臨む。 4 甘い言葉に惑わされる。
- 5 分厚い本を読破する。

B 次の1～5の傍線部のカタカナを、漢字で答えなさい。

- 1 班長をマカされる。 2 シャリヨウを移動する。
- 3 草木がカれる。 4 勝利に全力をツクす。
- 5 地方へエンセイする。

C 次の1～5の問いに答えなさい。

- 1 次の□に共通して入る漢数字を、書きなさい。
□兔を追う者は一兔をも得ず □東三文 唯一無□ 一石□鳥
- 2 「我田引水」の意味として適当なものを、次のア～ウから選び記号で答えなさい。
ア 自然な様子 イ 自分の都合のいいようにすること ウ 静かできれいなこと
- 3 次の文を文節で区切ると文節はいくつになるか、漢数字で答えなさい。
空を見上げると飛行機が飛んでいた。
- 4 傍線部の敬語の種類として適当なものを、次のア～ウから選び記号で答えなさい。
いただいたお手紙を拝見する。

ア 尊敬語 イ 謙讓語 ウ 丁寧語

5 現存する最古の和歌集として適切なものを、次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア 古事記 イ 沙石集 ウ 古今和歌集 エ 万葉集

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

高校二年生の倉沢明史(あけし)は通学途中に出会った少女に心惹かれていた。先日偶然、駅で大學生らしい男と一緒にいる少女を見かけ、男と少女との会話から少女の名前が「ソメノ」だと知った。それからしばらくたった場面である。

水色のものが眼の横をかすって過ぎた。思ったほど少女は進んでいなかった。もう一度自転車の向きをかえ、今度は微(かす)かに震える膝に力をこめながらもブレーキを引いてなるべくゆっくりと自転車を進ませようとした。

「……ソメノさん……ですか。」

声が出た。醜(ひど)く嘎(しわが)れた自分の声に驚き明史は慌(あわ)てて咳払(せきばら)らした。駅の階段下でのあの眼を大きく見開いた表情がぱつと振り向いた。

「ええ。そう。」

明史を見てその顔が怪訝(けげん)そうに傾げられた。

「朝よくバスでお会いしますね。」

「あ、そうですね。」

気がついたように相手は答えたが、まだその顔から訝(いぶか)しげな色が消えない。

「中央線を通っているでしょう。どこの学校に行っているんですか。」

「清水中学。どうして?」

①え、ときき返したまま彼は言葉を失う。彼女が中学生だとは考えてみたこともなかったからだ。

「……高校だとばかり思っていた。」

少しゆるみはじめた相手の顔に薄く笑いの浮かぶのが見えた。笑いかけると頬がふくらんで確かに歳相応の表情が浮かんで来る。明史が自転車から降りると、二人は肩を並べて歩き出した。

「高校はまだ来年……。あなたは?」

「西窪(にしくぼ)高。」

「あら。一年?」

「いま二年。」

こちらが相手の大人びた容姿に驚いているのに、相手からは実際より若く見られたのが不満だ。

「来年が高校受験か。」

少しでも歳上らしいところを示さねば、と明史は②見おろすように言った。

「うちの中学からだど、都立なら西窪高が学区なんですよ。」

「あ、来る? ねえ、西窪を受ける?」

少女がまだ中学生であったのを知って動顛(どうてん)したばかりなのに、更にその少女が

自分と同じ学校にはいることもあり得るのだ、と考えると明史は息が苦しいほどだった。「うちでは私立に行かせたがっているみたいだから、わからないけど……。」

眼を細めて遠くをみつめようとする横顔がまた大人びた表情に戻っている。それを揺すぶって自分の方に少女らしい素顔を向けさせようと明史は急(せ)きこんで言葉を継いだ。

「都立がいいですよ。西窪がいいよ。歓迎するからさ。」

「入学試験があるんですよ。」

「試験は大丈夫でしょう。ソメノさんなら受かります。」

「あの……。」

少女が口ごもった。明史には相手が何を言いたいのかわからない。

「お名前は……。」

急に声小さく恥かしげに翳(かげ)った。はじめて彼女が彼に向けて自分の言葉を差し出して来たようで嬉しかった。③倉沢明史という字を丁寧に説明した。

「どうして私の名前を知っているんですか。」

明史の答えをきいてから彼女は不思議そうに質(たず)ねた。駅で背の高い男の人と話している時に盗み聴きをしたのだ、とは言いにくかった。

「知りたいな、と思っていたから、わかったんです。」

「変なのね。」

彼女の眩きには、しかし彼の言葉を受け入れる響きがあった。

「でも、苗字ではなくて名前の方はまだ知らない。」

「知りたいな、と思ったのに？」

彼女はわざとらしい仕種(しぐさ)で子供っぽく首を傾げて見せた。

「思い方が足りなかったのかな。」

④道の行手にある白い柵だけを見るようにして彼は言った。

「きつとそうでしょ。」

おかしそうに笑ってから彼女は染野棗(なつめ)と名前を教えた。

「珍しい名前なんだなあ。」

子供の頃、隣の家のダリアが見事に咲く庭の垣根沿いに棗(なつめ)の木があったのを明史は思い出す。摒(へい)に登って手を伸ばし、その薄緑色の小さな実をちぎり齧(かじ)ったことがある。白い果肉は林檎(りんご)に似て小さく甘酸っぱかった。

「私には似合っているんですって。」

「なぜ。」

「さあ……。」

彼女は立停(たちどま)っていた。櫟(くぬぎ)林が終り、灌木(かんぼく)の群生との間に公営住宅に向けて右手に折れる道がある。

「こっちなのか？」

彼女は小さく頷(うなず)いてラケットを抱えなおした。どこまでも一緒に歩いて行きたか

つたが、彼女の姿勢にはそれを好まぬ気配があった。
「あしたの朝ね。」

自転車のハンドルを握る手に力をこめて明史は言った。彼女は黙って首を一つ下に振った。
(黒井千次 著 『春の道標』より)

問一 傍線部①「え、ときき返したまま彼は言葉を失う」とあるが、その理由を二十五字以内で抜き出さない。

問二 傍線部②「見おろすように」とあるが、その理由を答えなさい。

問三 傍線部③「倉沢明史という字を丁寧に説明した」とあるが、それはなぜか。次の選択肢から適切なものを選び記号で答えなさい。

- ア いつも名前の漢字を間違われるため、少女に正確に伝えたいと意気込んだから。
- イ 少女が明史に対してはじめて自分の言葉で声をかけてくれたような嬉しさから。
- ウ 丁寧に説明することで、少しでも長い時間少女と一緒にいたいと思ったから。
- エ 少女がかわいらしい容姿の一方でおっちょこちょいな一面を持つことに気づいたから。

問四 傍線部④「道の行手にある白い柵だけを見るようにして彼は言った」とあるが、それはなぜか。次の選択肢から適切なものを選び記号で答えなさい。

- ア 少女のあまりの子供っぽさに対して、少女の様子を直視するに耐えられない心苦しきから。
- イ 前方の白い柵のところに、アプローチの結果を友人がやきもきしながら待っていたため、早く伝えたい気持ちから。
- ウ 少女のあまりの可愛さに緊張のあまり直視することができず、どぎまぎする気持ちから。
- エ 素直な少女に対して、駅で少女と男との話を盗み聞きしたことを隠している自分への後ろめたさから。

問五 本文中には主人公が過去を回想している部分がある。該当部分について始めと終わりをそれぞれ五字で抜き出さない。(句読点記号を含む)。

世界中にロボットと呼ばれるものはすでにたくさん動いている。これからもロボット技術は発展していくはずだが、「機械としてのロボット」と、我々の抱く「概念としてのロボット」にはズレがある。言い換えれば、現実のロボットと、SF（サイエンスフィクション）におけるロボットは別物なのだ。しかし空想・妄想の産物としてのロボットの歴史はけっこう厚く、現実のロボットの歴史とはズレながらも、互いに影響を及ぼし合っている。

例えば、なぜ日本人が二足歩行ロボットにこだわるのかといえば、『鉄腕アトム』の刷り込みがあるからだ。ほぼ同時期に登場するロボットに『鉄人28号』、ちよっと時代が下って『マシンガンZ』、さらに『機動戦士ガンダム』という流れがあり、私たちは①ヒューマノイド・ロボットにファンタジーを抱いている。空想の産物たるそのファンタジー性が、現実の科学や技術に影響を及ぼしているというわけだ。

そもそも「②ロボット」という語を生み出したのは、カレル・チャペックというチェコの作家である。二〇世紀の初めに書かれた戯曲『R・U・R』に「ロボット」なるものが初めて登場したのだが、それは金属でできた機械ではなく、タンパク質系の物質でできた人工生命に近いもの、要するに人造人間だった。その用途は労働であり、人間に代わる奴隷のような存在としてのロボットが描かれている。

その後、コマンドを打ち込めばいちいち操作をしなくても、ある程度自動的に動いて仕事をする機械がロボットと呼ばれるようになった。そして二〇世紀後半になってコンピュータが発達すると、ロボットの制御系、人間でいえば頭脳にあたるものは、コンピュータが引き受けるのだということになった。人間や動物のような姿をした機械に、脳の代わりとなるコンピュータが搭載されているのが、ロボットとしてめざすべきイメージになったわけである。

最近では日本の自動車メーカーでも実験が行われているが、アメリカが軍事的に研究してきた、人間が運転しなくても勝手に走ってくれる車がある。あれは走行経路を前もって入力するのではなく、自動車自身がカメラで周囲の状況をモニターしながら走る仕組みだ。こうしたロボットカーは、人間の形はしていないけれども、一つのまとまった機械をコンピュータが制御することで成り立っている。これこそまさに、③私たちが追い求めてきたロボットのイメージなのだが、二〇世紀の終盤になると、現実の技術の展開のなかから、別のタイプのロボットがにわかに現れてきた。

インターネット上を勝手に動き回って仕事をプログラム、「ボット」(bot)という言葉聞いたことがあると思う。これはネットワーク上にアップロードされたら、あらかじめ仕組まれた命令を遂行していくプログラムだ。実体を持ったロボットと区別するため、「robot」の語頭の「ro」を落とし、「bot」と呼ばれるようになったのだが、あれも立派なロボットの一種である。

しかしそれは実体のない「ソフトウェア」。インターネットが大衆化して以降、コンピュータネットワークでつながったサイバースペースを、半自動で自律的に動き回っている。ここ

では、SFに描かれたファンタジーや想像力の世界に、現実のほうが先行している。

かつてのSFにもバーチャルリアリティを舞台にした作品が多数あったが、現実の私たちは、実際にネットワーク上の仮想現実空間と親しんでいる。娯楽としてのテレビゲームにしても、スタンドアロン、つまり独立したゲーム機ではなく、ゲーム機同士がネットワークにつながっているタイプが主流になりつつある。

皆さんの使っているパソコンも、ネットワークに常時つながっているだろう。OSをはじめとして多くのソフトはプログラムが自動的に更新される。インターネット初期の時代のパソコンはいわば閉じた状態で、プログラム更新ディスクや電話回線を通じ、ユーザーが必要なきに自分の判断で行っていた。しかし今はネットに常時接続しているのが当たり前。つながっているかぎり、こちらが頼みもしないのに、「あなたのパソコンはそのままだと危険だから直しました」などといってくる。

こうなると④一台一台のパソコンは、自己完結した機械とは言えなくなる。あえて言えば、ネットワーク全体が一個の機械であるような、そんな状況になっている。個々のパソコンは、巨大なネットワークの一部分を構成する「器官」「細胞」のようなものになってしまったのである。

（稲葉 振一郎 著 『これからのロボット倫理学』より）

問一 傍線部①「ヒューマノイド・ロボット」とあるがこれを別の語で表した部分を本文から八字で抜き出さない。

問二 傍線部②「ロボット」とあるが、最初に描かれたロボットはどのようなものだったか。次のア～エの中から適したものを選び記号で答えなさい。

- ア 人工生命に近いものであり、機械に代わって奴隷のような存在として作られていた。
- イ 人工生命に近いものであり、タンパク質系の物質や金属でできた人造人間であった。
- ウ 人造人間のようなものであり、労働など人間に代わる奴隷のような存在であった。
- エ 人造人間のようなものであり、戯曲の中で生まれ機械の奴隷のような存在であった。

問三 傍線部③「私たちが追い求めてきたロボットのイメージ」とはどのようなことか。本文の言葉を用いて説明しなさい。

問四 傍線部④「一台一台のパソコン」を著者が具体例として挙げているものを本文中からそれぞれ二字で抜き出さない。（記号句読点は含めない）

問五 この文章を二つに分けたとき、後半が始まる部分の最初の五字を書きなさい。

四

次の古文を読んで後の問いに答えなさい。

栗田讚岐守兼房あわたさぬきのもりかねふさといふ人ありけり。年ごろ、和歌を好みけれど、よろしき歌もよみ出さざりけ

れば、①心につねに人麻呂ひとまろを念じけるに、ある夜の夢に、西坂本とおぼゆる所に、木はなくて、

梅の花ばかり雪のごとく散りて、いみじく芳かうばしかりける。②心にめでたしと思ふほどに、かた

はらに年高き人あり。a 直衣なほしに薄色の指貫さしぬき、b 紅くれなゐの下の袴はかまを着て、なえたる烏帽子えぼしをして、

烏帽子えぼしの尻、いと高くて、③常の人にも似ざりけり。左の手に紙をもて、右の手に筆を染めて、

ものを案ずる気色けしきなり。

(『十訓抄』より)

問一 傍線部 a・b の読みを現代仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。

問二 傍線部①「心につねに人麻呂を念じける」とあるがそれはなぜか、説明しなさい。

問三 夢の話はどこから始まるか、最初の五字を抜き出しなさい。

問四 傍線部②「心にめでたしと思ふ」について

(一) 誰が思ったのか。次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 栗田讚岐守兼房 イ 人麻呂 ウ 年高き人 エ 常の人

(二) なぜそう思ったのか。説明しなさい。

問五 傍線部③「常の人にも似ざりけり」とあるがどんな人か、適当なものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 常に夢に出てくる人
イ 立っている普通の人
ウ 常に夢に出てこない人
エ 普通の人には見えない人

問六 本文の内容として適当なものを、ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 梅の花が芳しく咲き誇っているので、人麻呂といっしょにこの美しい景色を見ることができたらどんなに素晴らしいかと思った。

イ 素晴らしい和歌を詠みたいと思うあまり、夢に梅の花が雪のように散り香る中、不思議な男が現れた。

ウ 梅の花が雪のように散る中を、男が心配そうに立ちすくんでいる夢を見てしまい、それを和歌に詠もうとした。

エ 夢に、梅の花が咲き誇り香る中、きちんとした服装をした男が現れたので、驚いて和歌に詠もうとした。

五

作文

自分自身について、今年一年間を漢字一字で表現し、その理由を次の注意にしたがって述べなさい。

- 1 原稿用紙の書き方に従うこと。
- 2 題名・氏名は書かないで、始めの行から書きだすこと。
- 3 字数は百五十以上、二百字以内とする。
- 4 できるだけ漢字を使って書くこと。

